

30

20

10

4

3

2

1

0

JAPAN

TAMIA





义7

卷

洞庭人席

かくふのうとくとくにゆく

せきやのゆくとくとくにゆく

ゆふのうとくとくとくにゆく

めふのうとくとくとくにゆく



こうとおもひのりゆきをぢやせくゆ
じとゆづかだらむよしよし
めいごくはうをゆきよはう
めあはくちがおをそたむせ
き原すゑとくもひふみゆ

ひすきをもにめんのまるをこそ
くわくはくくうはくまくとくく
いをなすくはくもくはくはく
あくとくくくはくはくはくはく
とくとくくくはくはくはくはく

うのあひすくもあらわさる

此書はなほがてこのまことに

かかへせしるもくたゞしま

すく、城うわごとだもく

とがれよてひのくはすすむと

ひあらひ乃不二ひまくま。あ

るをぬあひこひにて板のくせ

るをぬあひうけきをうすゆふ

りもあひてはながいもじくふゆ

てまやかくたゆつ

文政二年三月

後醍醐天皇書體之元

後醍醐天皇書體之元

鉢狂人

いづこりいぢめる人よりらむ。近きうち衝口發と紫
書紙にうりて。みどりに大沸風といふをいやーと
おとつて。かけまくもいともかへこと皇統をりゆる。
もつかとも取くらぬもぢに論じておほひあど。もと
うね人のまゝ。今これを辨べて。名づくるこやかく
せめ。

彼書云上古のせ代天神七代地神五代となづけて。
これを神代といふ。神武紀尔此考か一百七十九事ニ

千四百七十餘巻とも。は年数もとより誨どる所あらず。
ば年数も。自天祖降臨以逮于今。と云きは。近ニ藝エキ命ミコト天孫アマツコノシロ
坐シテ。その上文アマツシテ。我天祖アマツカミ。遙アマツシテ。藝エキ命ミコトあるもて
知シテ。統アマツシテ。を今七代五代を含せての年数のめぐらハ誤アラカシなる。
忍穗耳アシホイシ。命ミコトより何なるれ年数アマツシテ。か。おいく百餘巻と云ふと云
あらば。さては年数を誨アマツシテ。小あらびと云ふ。甚アリきみづり
云アリ。誨アマツシテ。にあらざること。何をりて知シテ。ふうづアマツシテ。
モアマツシテ。神代フタヘゴト。傳アマツシテ。みアマツシテ。太アマツシテ。靈異アヤシくアマツシテ。常アマツシテ。事アマツシテ。小アマツシテ。
ある者アマツシテ。人アマツシテ。みアマツシテ。是アマツシテ。伝アマツシテ。とアマツシテ。云アマツシテ。
人アマツシテ。もアマツシテ。おのアマツシテ。のアマツシテ。かくアマツシテ。万アマツシテ。くアマツシテ。曲アマツシテ。今日アマツシテ。のアマツシテ。事アマツシテ。少アマツシテ。

さう方アマツシテ。尔アマツシテ。説アマツシテ。あはれをきた。そはみアマツシテ。漢籍アマツシテ。をアマツシテ。惑アマツシテ。ひアマツシテ。私アマツシテ。
あのアマツシテ。がアマツシテ。をアマツシテ。とアマツシテ。思アマツシテ。ふいひアマツシテ。すアマツシテ。がアマツシテ。あらぐアマツシテ。のアマツシテ。といアマツシテ。やアマツシテ。ふアマツシテ。
いアマツシテ。ひアマツシテ。曲アマツシテ。うアマツシテ。べアマツシテ。統アマツシテ。小アマツシテ。誨アマツシテ。者アマツシテ。かアマツシテ。きアマツシテ。あアマツシテ。いアマツシテ。ひアマツシテ。まアマツシテ。ぐアマツシテ。るアマツシテ。のアマツシテ。非アマツシテ。ふアマツシテ。かアマツシテ。るアマツシテ。ちアマツシテ。かアマツシテ。小アマツシテ。誨アマツシテ。しアマツシテ。にアマツシテ。あらびアマツシテ。とアマツシテ。てアマツシテ。まアマツシテ。べアマツシテ。神代アマツシテ。
のアマツシテ。傳アマツシテ。へアマツシテ。ハアマツシテ。坂アマツシテ。よアマツシテ。これアマツシテ。うけアマツシテ。已アマツシテ。かアマツシテ。ふアマツシテ。まアマツシテ。せアマツシテ。てアマツシテ。いアマツシテ。まアマツシテ。ぐアマツシテ。りアマツシテ。とアマツシテ。りアマツシテ。かアマツシテ。ずアマツシテ。れアマツシテ。るアマツシテ。小アマツシテ。仰アマツシテ。れアマツシテ。た。靈異アヤシきアマツシテ。をアマツシテ。以アマツシテ。てアマツシテ。こアマツシテ。れアマツシテ。をアマツシテ。伝アマツシテ。せアマツシテ。るアマツシテ。はアマツシテ。
又アマツシテ。日アマツシテ。一アマツシテ。くアマツシテ。漢籍アマツシテ。をアマツシテ。まアマツシテ。ぐアマツシテ。りアマツシテ。そアマツシテ。んアマツシテ。てアマツシテ。かアマツシテ。ぬアマツシテ。えアマツシテ。ごアマツシテ。うアマツシテ。ハアマツシテ。るアマツシテ。常アマツシテ。見アマツシテ。圓アマツシテ。のアマツシテ。事アマツシテ。限アマツシテ。ふアマツシテ。づアマツシテ。まアマツシテ。小アマツシテ。量アマツシテ。がアマツシテ。あアマツシテ。のアマツシテ。いアマツシテ。うアマツシテ。かアマツシテ。りアマツシテ。あアマツシテ。わアマツシテ。てアマツシテ。まアマツシテ。おアマツシテ。のアマツシテ。小アマツシテ。きアマツシテ。智アマツシテ。をアマツシテ。りアマツシテ。てアマツシテ。測識アマツシテ。べきアマツシテ。とアマツシテ。うアマツシテ。にアマツシテ。あアマツシテ。るアマツシテ。人アマツシテ。のアマツシテ。よアマツシテ。くアマツシテ。もアマツシテ。

うもも筋も。玆づくふその百分が一ふとひべしに。能もも
け天地の内ふを外ふも。上古ふゆくされふす。ひの外取る
いやうめ奇異きよめらむも測定ハカリニリてこれども。漢ふ
のなまひとて。左の聖人とふりの法始めせむ。みる。あのがん
をきてようづと思ひはよとて。かくらはべきだ。かくらるす。
にほぞと空をて。その己が空めらうとての至極と思ひ。此現
の外ハ取きことくねれり。その強コロひとては。書典ふのまう
形。二ふ年にもうする内のまうして。その間ふをきよハ。天地乃
始ハタハタも強コロひ決者ををきせとぞ。又その間の年数を。いと
いせ久ヒトツとよふを。天地の空窮あるらへふぞりて。

二ふ年こふ年あざハ。いさくふなど取るべきふもろよ
す。一そくをきふ定めむハ。智の基タガ小量あふにけし。ばや。も
べく人の智ハ。ふ聖人とふ者といへた。限カギリもてあふえむ
ぬよりはいと多き。まつてその聖人ふも及ばぬ人をや。今
備者神代の年数を伝へることひくハ。まとも。ば漢カシも
惑ひおがねく。まことの理の測ハカリて。天アメ地タケの始
終ハタハタ久を取るべきことを思ひより起きて。或人琉球
にまかり後アフタて。そむかすをかくす中ハタハタに。加々度と
ナキは大なる。百万ふの地を領ドリよこといひられ。かーこ
のかーこき人あざらひふ。日下人のお達ハミあをらふと

取りりとて。安もありに生とて。ひもとのよく仰ると
なる。まべて那まちりくかへ智らる人。薄がいふよう
てぬもは。いよくその多小量尔たむ。ゆりて智の開
きもくとふうをこねき。りその小量那かぬ
ごろ清くわかれ。またとの程ハはうり知るなり
ぞといふこと。ふよくはりあ。神代よ^{ウタカ}ひハリベ
け。折皇國^{アレヤ}。日海^{アシカ}を照一坐す。天照大古神の生坐
ふかつ拂ふすて。その皇孫^{ヒテ}令れ。天より降りましくて。
天地とともお遠^{トホナカ}長くあうし先を拂ふ那モハ。美國^{アシカ}
元す。て。あまにもぐれども。天^{アシカ}の始よ^ミ神代の

よを。いと詳る正しく傳り未て。今も古事記日本紀尔
のことを。亦まハ天照大古神の生ませる由^{アレ}よつて。皇孫
命のあらーめん由^{アレ}にあらうが有ふ。はト先より定まれ
君^{アシカ}ふあくして。惡神とこうとえてらびつ。由^{アシカ}すりか
く。その時^{アシカ}かへこきのつまき者^{アシカ}ひく。かもく君長
とハなりて。いとくみどりかへきか。天地のモド先神代
のるす。正しく詳ある傳說あくして。今までの由^{アシカ}
せを照^{アシカ}。日神の始を^{アシカ}えりを^{アシカ}。と。例のあれ
ありきうち^{アシカ}らのふまかせて。天地の始をもあひのすとも。あし
はうりお説をのこが^{アシカ}て。互うてあまきとかへこきの由^{アシカ}ある

ア。ナムハ正しく詳ふ。モリナシ。いつきの事もあのくいも。ト
テ上古の傳説ハ。ミテ。そのまゝとの傳ハ。いづれも奇靈^{アヤシ}きるヲ
多く。テ。神代紀のむぢ^{アラシ}。尔似^{アラシ}うきひを。蓬茅^{アラシ}。あど^{アラシ}。そみ
かく^{アラシ}。みのくね^{アラシ}。とす。みる不經虛誕^{アラシ}。ありと。と。アラゲ
ざりしか。御^{ウセ}失^{ウセ}。失^{ウセ}。まれ。御^{アラシ}。周^{アラシ}。玉^{アラシ}。周^{アラシ}
且^{アラシ}。と^{アラシ}。守^{アラシ}。守^{アラシ}。中^{アラシ}。也。殊^{アラシ}邪智^{アラシ}。ふうく。却^{アラシ}すに
はが^{アラシ}。を^{アラシ}。用^{アラシ}。ひ^{アラシ}。よ^{アラシ}。せん。の^{アラシ}。ちか^{アラシ}。増^{アラシ}せり。
拵^{アラシ}天地^{アラシ}。蓬茅^{アラシ}。人の^{アラシ}。すに^{アラシ}。ある。極^{アラシ}陰陽^{アラシ}。あとのめき^{アラシ}小理^{アラシ}
て^{アラシ}。決^{アラシ}。成^{アラシ}。立^{アラシ}。く。もれり。靈異^{アラシ}。微妙^{アラシ}。ある。理^{アラシ}。と^{アラシ}。成^{アラシ}

立^{アラシ}。く。されば。神代の事迹^{アラシ}。ハ。と。より。あり。や^{アラシ}。一^{アラシ}き^{アラシ}。の^{アラシ}
多^{アラシ}。べき。あ^{アラシ}。又。天地^{アラシ}。出^{アラシ}。ま^{アラシ}。て。より。以^{アラシ}來^{アラシ}。ハ。甚^{アラシ}。久^{アラシ}。き^{アラシ}。ある。べ^{アラシ}。れ^{アラシ}。神
武紀^{アラシ}。よ^{アラシ}。くる。年數^{アラシ}。を。何^{アラシ}。ハ。疑^{アラシ}。べき。是^{アラシ}。を。虛妄^{アラシ}。と^{アラシ}。て。取^{アラシ}
ざ^{アラシ}。ハ。や^{アラシ}。に。忌昧^{アラシ}。と^{アラシ}。べ^{アラシ}。か。ま^{アラシ}。と^{アラシ}。より。神代の事
き^{アラシ}。ま^{アラシ}。と^{アラシ}。傳説^{アラシ}。を。も^{アラシ}。さ^{アラシ}。の^{アラシ}。形^{アラシ}。れ^{アラシ}。ば^{アラシ}。せ^{アラシ}。む^{アラシ}。く。め^{アラシ}。一^{アラシ}。行^{アラシ}。か^{アラシ}
く^{アラシ}。も。皇^{アラシ}。玉^{アラシ}。ハ。か^{アラシ}。る。ま^{アラシ}。と^{アラシ}。の^{アラシ}。傳^{アラシ}。ハ。ど^{アラシ}。の^{アラシ}。所^{アラシ}。て。皆^{アラシ}。人^{アラシ}。これ^{アラシ}
う^{アラシ}。が^{アラシ}。む^{アラシ}。か^{アラシ}。と^{アラシ}。ある。これ^{アラシ}。を^{アラシ}。傳^{アラシ}。す^{アラシ}。と^{アラシ}。行^{アラシ}。か^{アラシ}
て^{アラシ}。う^{アラシ}。か^{アラシ}。外^{アラシ}。の^{アラシ}。風俗^{アラシ}。を^{アラシ}。か^{アラシ}。こ^{アラシ}。と^{アラシ}。小^{アラシ}。口^{アラシ}。伝^{アラシ}。す^{アラシ}。ハ。い^{アラシ}
恐^{アラシ}。ま^{アラシ}。ぞ^{アラシ}。ひ^{アラシ}。や。その^{アラシ}。中^{アラシ}。に^{アラシ}。疑^{アラシ}。ひ^{アラシ}。歌^{アラシ}。も^{アラシ}。か^{アラシ}。と^{アラシ}。
も^{アラシ}。不^{アラシ}。そ^{アラシ}の^{アラシ}惑^{アラシ}。い^{アラシ}。淺^{アラシ}。き^{アラシ}。を^{アラシ}。は論者^{アラシ}。の^{アラシ}めく^{アラシ}。人^{アラシ}。す^{アラシ}。も^{アラシ}。く。代^{アラシ}。か^{アラシ}

こかくもとそ。わざるるを浅廢るハ。よくまごひの基
き。かくとくとく辨じて。千枚百年にちみ付くる
かくぬとい乃癡ハ。あらもみやうふハ除へりかくもべられど。
かくもうちに伝むる人いすふを。ぐくかくべられど。人ハいうる
かくこきも智けりきりのえ。なましきああれ。誠の限ハ測
知く。にわざとし。をがくふはとりみ。まどふ。とハき。
かり尔その三代尔むとく分つときハ。一代大よそ六十萬年。ば
たりにわざと。古事記。日本書紀。古事記傳。小詳。小
捌拾歳。と。かくのめくは尊の年数の甚短く。又神武天皇

に勤まて。ハいよくちぶまり放つこと。人の勤ひあるべられど。お
れハ。みだるべき。かのをと。その。み細。ト。古事記傳。小詳。小
へき。バ。うふ。ハ。累。き。う。

天神七代ち名の。こふーて人肺附一

人肺附き。と。行を。と。勤。み。ふ。古傳。人傳。せ。も。已。か。ふ。尔
か。一。は。う。り。て。か。く。つ。ふ。と。例。の。傳。籍。き。の。俗。習。く。

地神五代の始。をハ西土の西漢の時。小。行。くる

まづ。地神五代。と。や。は。る。古書に。と。も。大。尔。遠。へ。称。く。も
あ。る。天照太祖神天。え。忍穗耳。命。ハ。る。天。系。に。坐。ませ。バ。天。つ
神。と。や。は。る。と。より。傳。み。し。近。い。藝。命。ハ。此。土。尔。天。降。り。放。へ。た。

此もか天つ神く。日子神う手元令曾不合今ハ此土小生坐ぬ
きた。け二世代をも天つ神の傍子とヤ。天孫あどごこそトセ。七
神とアセモと取リ。姓氏縁ふ神別の諸氏をニヨ分て。天神
天孫地祖といつふ。け七代くの御後をひ天孫幼よ收めて。地
祇よハ收免ざるを以て知べ。ゆきハ比神み代とアヒ称ハ古を
も知り。すら後世人のみぞアリホイヒ出づ。これにての御
歎きにわづく。まよゆれをモハ。かくいハ洞とう先ふ似られた。
は神者古き古之御ちくべ。古より記日が紀をキヨトによく解
ちる。とく。ノモト。上古を論す。と基みぞアリ。ある
い。す。う。難か。おく。け。おれ。起。モト。古。に。時。き。と。皆。じ。れ。と

知べ。さて天皇大法師のまつたがとまろ。初一ハ。ウメ一百
七十万餘宋よりも下遙尔古ヘのすよホトモ。ち年歎ハ後ハルカ
ごと取れハ。幾百萬宋とリ。と云ひ。既云ふ今例の達函
のきづくに夏殷の代あとよりこあくは年紀を立て。さかく少
あす小き説ふ形ういて。小此はうむとももハ。いとくあ
けれくすむ。

辰韓ハ秦滅亡す。素戔鳴尊ハ辰韓の主す。と
此辰韓國をとりうつゝ。秦の代より後のみく。又何事も
皆韓より起きたまふ。論者の意もそのかく。先きに須佐之スサノ
男命を辰韓の主とし、と。さるは接する。固て拙いと
考へ。

このれト神代紀尔。此神新良の玉尔降り降りてとてりうとて
て授ともうわフベ。そは新良即辰韓といひてしゆめを
た。それ大尔説きよこと。折須依え男、拿ハ天也大傳神の古弟
令にま一ませバ。かねかの「一にく」。周武王が箕子を朝鮮尔封せ
し時もどりも。故百事來以前の神也てま一ぬせバ。くぐくノル
辰韓の辯をどみ及ぶるもあれた。姑く論者おきと立てもも
ふ。まづ新羅を辰韓ともいふと兼忽く。そのよハ先。韓
セの沿革を詳みて後ハ辯ぞべ。折今ハ新羅も。左の三
韓を解る句農様貊沃沮などふくと混一してゐる。
二韓の地ハ今ハ朝鮮の内の南方半分ばかり。三韓とハ馬韓辰

韓弁辰の三、ふて。韓ハ西より来てた。辰韓ハ之の東にありて
小く。弁辰も辰韓の南よりちて是も小く。さて周武王が箕子
を封じての朝鮮ハ三韓より北より来て一小國なり。其
漢代の始つて。燕の亡人衛滿の玉を取て。孫のせまでも
ちある。此時ハやゝ大か。侍ある。麗穢貊沃沮などをも
ちて。これの多くも別尔君長も。おもて南歌
三韓ハ別ゆて。三韓も多すよ。辰韓弁辰尔おもく十二郡あり
て。もと七十餘の小郡有。さて魏志云。弁辰の内尔二十六郡
もてその名をと舉る中に斯盧云とふら。これ彭羅也。
北史の彭羅傳尔亦曰斯盧國。といひ。左小唐書尔彭羅。弁韓

苗裔也といひ。古代史尙も新羅、弁韓之遺種也といひ。然き
ハ新羅ハこそ弁辰の中は一國なりて、辰韓アシハン亦は狀ふこと
あらず。然るをりうこゝへてもこれ以降りて辰韓と
いはざる者なし。北史カヒ、尙新羅者其先本辰韓種也といひ
たゞひ是也。これは弁辰を弁韓とも弁辰韓ともいふ者也。
辰字によくて辰韓とす。それより三韓と
いふ名ハ見えず。これを辰國といひ。後漢書カヒ、尙三韓、
皆古之辰國也といひ。然ると魏志カヒ、辰韓者古之辰國也と
いひ。鄭師古が漢書の注カヒ、辰、辰韓之國カヒ。是らも辰字に
ありてふと誤きるものにて新羅也。魏志カヒ、小豆アマと甚

小豆アマと呼みて。晋書カヒにもまづはる。宋書カヒ、魏書カヒなどにも百濟の
傳カヒ、新羅傳カヒとも取。北史南史尙も新羅傳カヒも有。
總きハ御く小強太よ歟。その比カヒ、廉百濟と鼎足のめぐれ
並カヒ、御くと云也。日本紀カヒ、爾々カヒ、御くと云也。かくて後ハナはら
け三國カヒ、三韓カヒと云カヒ。ちかひ御くべ。も中に百濟
を主カヒ、韓とするハ遠カヒ。新羅と辰韓アシハンともハ遠カヒ。上
あいづらめ。又も麗と弁韓アシハンともハ殊カヒ、ハ遠カヒ。弁韓アシハン
韓カヒ中ゆも最南に在。も麗ハもと三韓カヒ、ハ別カヒ。て新羅様
貌カヒ、どをへゞて、北方カヒ、西方カヒ、南方カヒ、東方カヒと云うて、傍
風カヒを多く併せられた。そのかえ、并韓アシハンの地カヒ、その域内カヒ

何うするをや。ちて三韓のす。漢の代の史尔記すところ。次第
尔あ史の文と云はゆりてまきまくいなす。かの弁辰と辰韓とを
混トシム難いと多一。又も人多くせど、ハ渾りぬ。し。今も
その代の史たと引合せて考へるところ。件のめく。先るに
諭者漢籍とバ互々に伝じて。かくのめく誤のつるをもえ
はく。新羅即^ク辰韓と云ひて。姓氏錄^ク新良のすと引合
せていふをと皆謬^ク。新羅ハ弁韓^クで辰韓^クハ非^ク。と。上件
のめくされば。須佐之男令辰韓の縁を。折今諭者上方の傳說
と破^ク。新說と立^クむとぞ。その本^クべく否^クとよく固めあるて
こうよ^クべき^クあるふ。その考へ基^ク證忽^クて。根をとすり下^ク

まげかくのめきお遠^クいハ。餘^クも准^クかべき。又秦の亡人
えの文を。後漢書魏志晋書等小記せらす。形^クふ。その
本^クをほ考へぬ。さへして。いづれ後世の東國通鑑尔接て
定免^クする。いづれたゞか^ク書^クまで。ふりもバ。行^クものまにて
もみあた^ク。形^クす。也^クとぞ^クあ。

姓氏錄右京皇別新良貴彦波歟武盧鷦草普不合尊
男稻飯命之後也是出於新良國主稻飯命出於新羅
國王者祖合日本紀不見

姓氏錄此條板本ハ誤^クきて。主義^クす。も。あのをす。爾古本
二本を以て校合^ク。アリト。お。いづれも是出の出字取く。國

字の下に即為國の三字す。是於新良國即為國主とひる。先ふてよく號へり。出於の出字ハ。下を出於とひる本よりまきれて。上も入也。又即為國の三字ハ。國字がニツヒよりまだきて脱^{オナ}るあつ。かうかうとつを教ハ。もやせ間^{ホム}を取^スてえー。さくち下の文也。古本も皆板をと内ド^トく。後誤^ミべー。こうみかいも。下の出於と二字とも小衍^ハて。稻飯命^ハ新良國王之祖也とやききも。お^ハじうくめく形^ハ上文と意貫^{シラス}くべゆくぬす。今引羅雲^ハ渡り^カとあが^スきと行。もよ^ス古文記傳^ハいり。さて論者云々紙^ハ本引^スる。神武天皇、周惠王よりはる^ク爾後

ありといふ。社尔^ハくわを。件のめく板を脱誤^ハりて。論者の言^ハ及覆^ハくわをば。にうおハ。そもそも論者。何^トありた引出で。己^ハ說を助^ムとするんのこまくみもやれるから。いまも三稀尔^ハくもとと行^スを。ば^エつくるまくわ引出で。文義のまくぬるもくつぐ。あうけ疎漏^{アリ}て。やくふ^{ヒコト}おら^ハまちやくしてられ。いて板をの誤ある由^ハ。稻飯命^ハ舊不合^スるの男といひが。たちまちふまく出^スる。新良國主^トハいふ。めく^ハ舊不合^スると共ふ新良王^トり出^スとまもる。姓氏縁^ハ。け論者あくの說のめくにふまくせり。べき私のまく行^ハ。新良^{タチニ}進^スる公の出^ハ

ふる。皇祖あす昔不合ると。新立王すり出でまつて可めしむ
やも。又縮飯食め。新立王すり出でまつ。此姓ハ諸蕃にこそ收む
べれ。いとてう室別ニハ收めし。室別ニ收まつは。神武天皇が
内見あまよまんがな。

神武帝の辛酉元年と周惠王十七年が、周

惠王の時行。辰馬の二韓行。

備者と漢國のまとのを授へて。三韓などともみる國の代
よりハ後の事とぞ。めもれ。施うざらと。はまゆてその國に
こと成りしも。周より後ふてもあらめ。ちゆくハ必ずより
有て王もしく天子のはづめより數百万年の間不も。いく

度々交易行ひて。ヨの盛衰人物の内を増減あるべくも。ハベ一。
絶きたかほひままで上古の传说詳なれば。はるか上代
の事也。傳りし事と多き。と多き。と多き。と多き。
いつの代とりふこと多き。物はく。物はくべき。漢國の書尔其
せざる。うびりをば。あつて。皆後のこと。それより以あよら
そ。の風くもねりしめくふ思ふ。例のいと小さく。み辰
韓のめきも。周の末秦のめきも。志よく。人の境まで。秦の亡人
の末。より人物はく。そめ。それよりはるか古く。又人物
ももくよろと。おーも。測。うかり。うどひ。辰韓ハ。いふ。も。られ。
須佐之男。今。の傳り。改ひ。ハ。弁韓の新立され。辰韓の始

尔ハからうこと取れ。けでこゝ尔辰馬の二緯といふハ。上不
引る東風西燈。辰緯ハ常用、馬韓人作主、といふ者尔。馬
緯のゆきも出さる。これ又晋書の文也。かくてる緯をも周
より後のみと見る。され東風西燈みどり。百済などの始祖と
も。漢代とも云ふ。すむか取るべ。然もたその後せまでてき
る王乃始祖。漢代とも云ふ。そきより以あら。そ
の先祖をぬ王も有ベ。又百済ハとハ。緯五十條の
内は一ほもてとぞり。五十條あるのく王も有ベ。いつき
もみを周より後くとハ行をめても。又後漢書小三韓皆
古之辰國也。馬韓最大共立。其種為辰王盡。王三韓之地。其諸國王先
説なしげや。

皆是馬韓種人焉ともいふふすれ。かとニ緯の總王も有ベ。
其諸國の王もみする緯統人そ。七十餘ありつる。あとく
く仰きの代より始まるといふことかへきふり。と。百済等三
國の始祖は准じて。みれたとく漢代より始まるとせむハ。説
説なしげや。

五代の事歎知。大。大己斐令ハ素戔雄の子也
て。も子事代主令は女婿。蹈鞴至終。其令神武天皇の后を
き。巴。大概察モベ

大己斐令を須佐之男令の内ふくと。日本紀よりていふが
也。古事記小よる。末ハ六世の内孫也。も宮五世の神名す

一ノアリ。さて上古ハ先祖をハイキセキモミニ於夜トイテ。
有尔祖，字をもとより訓ミ。又子孫をハイキセキモ皆尔孙といリ。
代の天皇或天津神也子とヤヒシキても知ベ。されば日本紀
ユ須佐之男命也ふとうも。もとのは、^ト子孫のきふとし
ナリ。また又子孫姫命と車代主命の内女といリ。神武紀は、
又いかで尔祖てひいてハ遠シ。ことく。其姫命ハ神代紀。車代
主神ハ尋鰐^{ヤヒロワニ}也。三島の溝櫛^{ナリ}也。小妻^{ウミ}て生ませる也。され
を而又車代主神の現身よハアレ。後^{ウツシニ}おび神を祠^ラキテ神
社の神靈^{タマ}。ハ尋鰐^{ナリ}也。ひいての内^{ウツシニ}。これをちり紀の傳へ
ゆて、三輪之大物主神の内^{ウツシニ}とせざを合せても知ベ。大物主

とヤヒシキ三輪爾^ル初^ルの店^{アシ}。有尔三輪之とアリ。独^クバ大物主
尔も^ク事代主^ルも^ク。その現身^ルハ非^リ。神社尔ま^ク事
神靈^ルある^クと^ク。大和^ル事代主神と祠^ル神社
これ^ク。又神靈^ルの男身^ルを^ク。女を娶^ル。子^ル生^ル
ること上代^ルハ例多^シ。凡て神爾現身^ルいふと。後尔社尔ま^クる
神靈^ルが^ク。とのう^ク。と^クハ天照大神^トハ。神代紀のめぐ現身
きもヤ^ク。又伊弉諾^{ミタマ}も^クいつにまつ^シ神靈^ルともヤ^ク。めぐ。舊傳^ルの神學
者ハ。やうのくは^ク。き子ぬ^ク。ハ^クえ考へ^ク。ば^クて。ク^ク車代主乃
店^{アシ}の^クと^ク。さる^ク尔疑^フ。す^クお^ク。精密^{アシ}古学の眼
を^クりて。それ^ハいと^ク。う^ク取^クもの^ク。あれ^ク。年代の論^ル

要あるれた。論者古尔昧くして。かほ子細をもつらひど。みづりふ
論者をいふ。いさううきを辨する。年代のより上よい。ゆめく。神
代一世といへた。いとく久をかることあれば。ぬきひ神武天皇の
后須佐之男命の直の。は女とも。もくも妨あきあそや。

神武天皇元年辛酉ハ後漢宣帝神爵二年辛酉亦て云
加くのあく六百年滅せざれば。三國が年紀舊合をば

三國とハ新羅の傳する牒をいふ。そのと年紀ハ尙尔も
考ぬ。きとこうなれば。三國史記をよむ。經をとひかれて。ふ
るべ。おもくおまへとふ。後のあく。て。信。かくとれ。など
おろく。年紀をもぬか。つるやか。おなくて。古のとれを記

せるハまぐて。接とくる。かずがる。おる。おもとらひ
はうじて。ゆく。ゆく。接とく。論者。の。法見。か
もかくれて。うりとく。り。此と彼。と。照。て。正。も。と。か
は。吾國の。古。と。ち。と。ば。よく。考。へ。合。せ。て。く。そ。正。そ。べ。き。ふ。
古。ま。の。考。へ。と。甚。廉。忽。す。て。直。り。て。迂。遠。る。化。ふ。の。謬。誤
あり。き。後。せ。の。事。を。以。て。つ。き。御。論。者。は。確。ハ。隣。の。屋。根。を
准。と。て。己。が。家の。梁。を。傾。き。く。り。と。い。も。じ。が。め。し。屋。根。を
片。低。ア。と。ある。わ。お。る。と。い。え。ち。と。ぬ。を。き。の。る。く。と。宣
帝。神。爵。ハ。前。漢。ある。と。後。漢。とい。ハ。傳。写。の。誤。を。さて。神。武
天。皇。元。年。を。六。百。レ。年。こ。あ。く。ち。が。きて。漢。宣。帝。神。爵。二。年

とも定め。例の東風通鑑が新羅の始祖の元年と。うむ
宣帝の五鳳元年にあてて。小後るなりべし。五鳳は神爵の次の
年号也。辛酉神爵二年也。もばく。折かくのめく年を定め
ていへる。もといとをうじて。もと。もとハ日本紀の年紀を用ひて
きて。六百年遠へりとある。也のまゝ。辛酉とうじと。用ひて。ハ
いふ。うむえ年のうねうじ。辛酉あらへきと。何よりて。かく
そや。ある年も遠つて。もあらば。辛酉ハいよく。おぶつ。取そゆ
なしきや。笑ふべし。さて。諭者のかくのめく定める年
紀も。又。も。須佐之男令と新羅王。いふと。皆合せ。いふ
ふといふ。新羅の始祖元年。漢の太風元年にひそり。神武帝

おえ年も。その三年。あの神爵二年。おむす。む。帝の后は
曾祖父ある須佐之男令。新羅王。おらば。も。始祖元年より百餘
年前。おきべし。う。須佐之男令ハ始祖。り。あの王。と
せば。その年紀。又。何。を。ひ。て。定。め。む。おき。ば。り。後。て。此。年。紀
を。含。む。と。せ。ば。終。百。餘。年。ば。う。も。も。お。く。ち。を。て。垂。仁
天皇。の。代。の。末。お。う。小。り。て。ざ。れ。ば。合。が。る。も。終。又。東。風。通。鑑。の
三。風。お。う。年。紀。を。海。ぞ。べき。もの。多。く。れ。た。く。ぐ。く。一。け。れ。ぞ
も。う。つ。

かくおぶとく。新。一。き。る。を。史。記。ふ。も。新。鮮。傳。も
り。も。ど。も。日。中。傳。ハ。一。漢。ま。ふ。も。お。一

まで漢の歴史ノ代の傳と立てる例。おもくハシムと通
好して自古不り。うるうるするもの。史記ハ鮮傳のうちも。
自古小係きよさうめあるをあり。西好きば自古にうづる。う
れきよくハ。おもくハ傳を立てる。西好きば。史記ハ傳耶
ぞ。おれにすうと立てる。いとく思ふ。一統ハ史記ハ傳の
なれど。みぞそれより後尔出來るにや知るべ。又漢書
ハ別々傳ハあられども。樂浪海中右倭人分為百餘國といひ。
後漢書小は。倭凡百餘國自武帝滅朝鮮使譯通於漢者三十許國
といひ。漢武帝が朝鮮をころそへ。宣帝神爵二
年より五十年ばかりあれば。アホとハ神武天皇すり前

の子ナリテルハ也。

皇統

或記云。神武天皇は母ハ玉依姫。昔不食羊子爾ハま
ま。古ノ年も昔不食羊子。ヨリハ先ハ是。卷伯
の苗裔も出させり。中署後^{アキアヘス}ハ。又南海を渡き大
倭^{アマツ}に饋^{アシテ}日令長^{アシタ}。教を開きゆりて神武天皇
は古より仲哀天皇まで盡^{アシテ}せり。累^{アシテ}御神天皇ハいつ
くより出生せり。胎中天皇いろく絞^{アシテ}りく忍^{アシテ}り
かきまくともかくこれ皇統の子^{アシテ}。すも承きまく。不

いひまげをすうなれば。見るにかくしていさゝこれを辯ぢる。
まづ或記云といへば。實ハ傳者の傍りてみづくら造もる説より
て。神武天皇是泰伯が後へといふ説と伝ふせむが。ものあくま
く。いづれといふ。の実に或記云へば。かくしん神武天皇ハ某の臣
子くと店父をもひべ。モ一店父詳あひば。又その事へを以い
ふべき事。おふくろ昔不令子は子にまつまつびとのもいひ
て。一之も店父の事。ハ於くて。まづ始より母を依姫とのもいひ。
傍作の起き。うらうらする。これ下の今拙ふ。泰伯の苗裔。け
説ふ。あて。玉依姫を娶て。といふ。すといふ。むしめふ。かくふと
先。その内母はうりをいひて。お父の事。ハ。今拙をまちて。かく

やうに他と含せしも。又店父をよいひぬ。いともあれ。それぞ
は年はる。取どり。ハ。べく。も。り。ぬ。昔不令子。すり。い。も。ド
あく。とい。る。も。は。従母。是。お。と。も。る。今拙と助。む。ぐ。と。も。る。又
□ 亞。南。海。と。凌。き。う。と。り。ひ。て。そ。の。出。路。ひ。ー。地。名。の。而。と
虫。喰。ひ。ー。も。又。ド。く。下。の。今。拙。の。琉。球。を。信。ル。せ。む
。又。又。モ。勃。興。ー。ゆ。地。名。蟲。魚。は。破。う。き。と。り。も。け。虫。喰
の。而。ふ。ら。を。ほ。き。を。よ。せ。む。と。き。そ。の。虫。喰。の。下。に。そ。の。字。を。を
ま。ふ。え。せ。ま。る。又。次。を。も。今。ー。虫。喰。と。す。ま。ハ。ー。あ。て。ハ。ギ
人の。疑。り。む。う。と。思。ひ。て。あ。ぐ。う。あ。る。と。ば。ア。ン。セ。ま。る。ん。先。ま。ハ

け或記ハ。下の今拙と信ふせむしめれ張か尔造アムモカ
て。づべきるをいもびのう一至て。今拙とおほて奉はざか
やにあくこゝるのこげあぐひの傍アヒト狂かゆも。
よまむひんひモベ。さて泰伯の子ハ。がと漢の晋書の倭人
傳尔。自謂太伯之後。といつより起アテ。些ちふても中古。けか
ふの説を信せりものも多て。姫氏國アドリスカとモ。化きア。又
近世或人。天照大神トナハ。モモリス吳。泰伯モ。近ミ蘇令の
アカリシテ。アカリシハ。その子孫の吳。ヨリ後。アカリス人と
いア。また近キセモ。けの説をいひ出。アヤセ殿也と。アヤセ。自謂
とハケ方の人のみづくい。形れ。上古より。け傳アリ。モア。け

とちべれど。もとて漢籍ヨラブ小室の子といつハ。うなごと多く
して伝ドガ。かたと。下に多く。べ。後世の子ハ。け方の子ハ。
け方の人。古く。かき。あ。その邊へると。け。ふ。か。を。
上古の子ハ。け方れる。け方の人。もたしく。ふ。か。を。ゆ。ゑ。尔。
邊へりや邊り。やめ。く。那。く。ば。く。漢の書に。い。と
をみす伝。ぞ。く。が。自謂。と。記せ。も。實。ハ。い。ぐ。も。く。む。け。ぐ。
け。く。ぬ。ア。と。あ。れ。た。ア。ハ。西。玉。の。き。鄙。の。を。この。者。取。ど。ア。く。
く。の。玉。尔。ま。か。ア。海。ア。ー。ガ。か。の。玉。人。尔。タ。ト。マ。れ。む。あ。を。了。
偽。り。て。み。ど。ア。ル。ハ。ー。子。も。有。や。ー。を。も。と。尔。か。く。小
お。不。つ。ア。き。こ。と。ア。折。泰。伯。ト。ア。お。玉。ま。で。こ。そ。た。ふ。と。く。も

行。西戎あれを。皇玉そハ行のちをすうり。猶とせ
のん。何と尔づけてもはるをみどりにす尚まるひよて。孔丘が
至徳とは多き人あれば。多くものふとひて。げ説とよろこぶへ
も中ちうりき。今け説者のき。須佐之男命と韓人など
りふと根かうて。あのす皆韓より起きてとまくらむ。げ泰
伯の説もあたかく。ぬにゆうすうれば。廢ステむとの情コト。是と
も引て説を他タチにす。漢籍小摺て説を立むとあら。倭と
秦徐福が後タチといつてとある。これかのゆみて。すまぬ人すまふ。
け方かで。説を取る人あらむ。説者ハメとすりたとすまふ
皇玉をいひあとすむとまうめのれ。泰伯よりハケ徐福。て時

代とみほの神爵二年か近く。又海ウカを海シマびて。東方かあり。な
ど。かとこれひと似つ。かくべきふ。こそと。引。入。も。よ。ハ。考。へ。り。せ。す
あ。う。と。と。皇。玉。ハ。ア。リ。ア。ム。と。天。照。大。日。神。の。皇。統。あ。る。と
昭。こ。れ。ば。い。う。か。巧。言。妖。妄。の。説。わ。り。と。も。か。ぬ。に。惑。ひ。ぬ。ど。も
か。ハ。行。さ。む。も。く。と。と。べ。く。も。う。ぬ。あ。を。や。又。け。或。記。不。
神。が。大。皇。天。神。ま。ハ。仲。哀。天。皇。そ。て。盡。そ。を。終。下。異。と。い。へ。る。是。か。て
も。又。説。者。の。偽。作。あ。る。と。い。よ。く。行。く。も。う。り。仲。哀。天。皇。小
て。盡。そ。を。す。み。と。い。ふ。能。く。ば。か。く。比。應。神。大。皇。ハ。そ。の。皇。子。か。う
り。く。じ。と。い。ひ。て。ま。あ。を。も。行。と。き。よ。べ。き。る。あ。る。爾。應。神。大。皇。

の。ま。す。と。い。ふ。と。い。は。ざ。る。く。又。神。武。帝。け。古。父。を。い。む

さると曰ト化をみて。今拙小胎中天をいのく疑トといふと
お思きも之のこころ也。直ニ神玉室の傍すハ下に辨むべし。
海宮といふも琉球の惠平也嶋といふも日本紀尔阿麻美又
菴美尔作ミシ嶋の東山小山也。天孫嶽といふ土人いはく
け山上古神人降臨の地。あふ嶋の名とモ。神人降臨
とハ則ち是火出見をめほすと云々太伯の裔け嶋よ安
モ。玉依姫を要て。神武帝生れさせ致ひ。

海神主と琉球の事とハさきに或人より。又尉馬ことひ説
も。さもく海神主の事ハ佛也亦もかくぬに。全く
似てゐる所也。大竺尔も漢書にも上古より傳へまつむ

を。かく承ひと例の承まぢりらみて。召常の小理もあづきて。
海底小別尔これあると云と伝もるといひ。已からくにまうせ
て附今手の説を取せよかやくふをつづけかアと捺尔
て。そぞかしきといたゞ。いやうにもひなまくとぞうし。
今傳者天孫嶽神人降臨の地といふを以て摂とぞれ也。神代
の三世より日向に坐キ。一、二は。その間尔もあく琉球の地モ
行幸イテ。二ともみて。ざら侍の行もあぐ。又くふ弘
簡縁了。琉球ミ據其世續圖云。宋淳熙十四年舜天即王位。舜
天為朝公之男子。民苦疾疫多依英祖。英祖者天孫氏之後也
といふ。或人の説。為祭公といふ。即桂西八郎為祭の事

にして。うれ世人今に至るまで。為朝の天孫といひ傳て。舜天王
と号まれ。英祖といひも。旁支也。王位は代々。アリとアリ
アリといひ。誠ニ神也。為祭も皇室の人にて。天孫の源氏
されば。天孫の後といひつゝて。かの天孫嶽といふ。その天孫と祖
きをせあどてもす。されば。かく。うれ鷦鷯。天孫嶽といふ。う
れ。とても。うれ。海神。まろ。祀。ハ。い。そ。う。れ。又。論者。日本紀
等をばちべとぞ。たゞ。に。是。を。い。破。む。と。も。す。
天孫といふ。称。ふ。づ。き。て。ひ。れ。を。用。じ。ま。ハ。い。ふ。り。日本紀。と。さ
ぬ。り。の。な。く。天孫といふ。称。を。も。取。ま。す。そ。よ。う。あ。ふ。己。が。要。ひ。る
う。う。め。う。を。う。れ。以。用。ゆ。る。こ。そ。ひ。き。く。み。り。き。又。惠

平也。嶋の所。かく。ぬ。と。多く。引。く。ハ。伝。の。用。を。や。もう。お。で
を。の。ま。え。鷦。と。り。ふ。の。祀。あ。も。取。く。ビ。天。孫。嶽。と。り。ふ。の。祀
に。も。う。く。ビ。と。う。海。神。ま。ろ。祀。あ。く。ビ。と。う。惠。子。也。鷦
とい。か。ふ。を。祀。せ。る。れ。され。ば。こ。く。ふ。ハ。キ。益。の。う。れ。く。す。や。と。て。又。泰
伯。の。裔。け。鷦。の。廢。と。ま。て。う。そ。れ。う。ハ。伝。の。櫟。も。み。き。例。の。姿。说。く。
天。孫。嶽。も。と。ひ。玉。依。姫。と。天。櫟。も。み。せ。よ。泰。伯。の。裔。も。り。伝。の
御。う。あ。う。み。づ。く。と。け。孫。な。だ。う。を。あ。う。ろ。よ。か。び。と。つ。う。
う。け。或。記。を。作。と。出。て。強。て。孫。を。乃。く。せ。く。わ。く。れ。ど。海。神
宮。の。う。ハ。げ。作。と。よ。い。と。ま。ろ。と。遠。む。と。あ。う。ふ。か。く。引。入。き。
う。ち。天。孫。嶽。王。依。姫。を。餌。あ。て。せ。ん。と。泰。伯。へ。喰。つ。う。セ。む。あ

先代くくも。

断髪文身ハ吳越の古俗也。三才図会云右大琉球小琉球云
男子去鬚，黠于手云々女人以墨，黠首為龍蛇文云々と琉球の
古俗句吳と曰ド句吳の人ハホトうきう風俗あるを知
し。日本決釋ふよれば本邦もと文身の事あれば神武帝東
征の後も人へきて。も俗のうつるものかくむ

琉球男子黠于手といひて北史階書等は琉求國傳小婦人以墨
黠手為蟲蛇之文トモシカキ。男子黠もうすいゝと云々。三才図
會ハ此北史等の文をとりて廉忽と誤きる也。そこで風俗曰
ノれどとて。か吳とまへ来てうづねう性あひいぐやくめくむ。ゆく

おのづくにド風俗あるを。もかどうなかくむ。又皇國の上代文身
形り一と。けくにわふをも。日本決釋といひて。うけ或記乃
もみうひとゆの。これ漢籍をかりふ挿てハ人の難せじとを恐
きて。うほ書名を偽りて説とせる歟。されども一くねくね
後漢の書ハ。いづれども。ともいそと。説ともくふく。早急惡
人をひそむくばかりけく。かくふくハ倭男子皆黠面文身以其
文左右太小別尊卑之差と後漢書にいひ。魏志ハも今倭水人好沈
没捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後稍以為飾云々あどいと見る。
信用ももかたゞ。又ふかこれハ上方九州の海きのりあるど。
けくふくセーが五つを。併く説りてかくハ記す

ありべし。大さきかの事もどもふとて。皇帝はすとあらせる。非ある事
いとあり。必ずおまれくに實をほじるる事もす。ねる
縁起。それと准じて。非なるとも皆實あらむと考ふもの
とゑく。況紫の偽僭の者にあざむれて。そこを皇朝とひそ
て記をうる事。あのをばに小馴戎慨云と著して辨へるが
め。さて他事の事を記せる。とひの外ふ淳^{ウキ}とみの多
き。代この史をこれと引合せて。こゑく考れど。お後
お邊へて含ふることわざく。お史の非が後の史ふて又くる
もと。又お風俗など。あやくハ前史ふすりて記せし中に。も
と漢書と考へ西漢。もとまことにあす。又お史と鹿鳴小元

得りて。うぬぬふ記へ遷へる事多く。又くわかれざるヲ
を。人のつまにちうて。太ふ寒ふとぞもと。又その事と使者の
ゆきて。またうりえぞとぞと記す趣あるにも遷へる
事。そはその仗者の復命の時。小傍りきこと殊ふ多く。又語學
すもかれん。又もつて漢書の史も。漢書と主とて記せしもあり
あよ。その文のうるを。他事ハ皆賤へくて漢書ひとりとすがふゆ
るこゆ。多く。漢字を用ひざる事。お王より贈賜する事。大もとそ
のと改じて。漢書人の譯へおはあれば。文漢書王をいみじく
あふとぞくめく小半あせり。これとも實ふをあは王の事。
と隣書西のありじとありしをも。おへて朝貢のやく去る

あるたゞひそ多るべし。もべて漢籍ハ、やうの所とよくいはれてアリ。されば、まどりきくもあわせむか。又もくすふ虚妄歌とぞ。まみ例をいふ。梁書南史をく扶桑といふ國の傳と立てる。其國在大漢國東二萬里地。在中國之東。といひて。その風俗をと多く記す。今考る。もろこゝの東の方に別称大漢國といふべき事も珍しく。又扶桑といふ國もうること取。とくも古き時代によりてかくもた。實ふをほんじへ。今もあるべし。今さるをほんこと取。れどこれ全く虛妄あると論す。すもと齊永元元年其扶桑國の慧深といひ一僧が。荊州より來り。諸の語のまこと記す。うなり。思ふにけ僧まとハ何きのあがく

あるうち。ねども古きまともか。東方日出のそとに扶桑といふことを経とひようて。されば國の名は佐宣。その風俗をとまことあがふ。こはへくいつなり作りて。おのきそものより本きうとひざむれいすと。虚実とよくも察せをして記す。あく。かくて後の書とそもにもつぎく。小紀せる種よ。ほひよ。實ふける。ほひよ。に思ふを。これぞの始。ばくどう。一妄俗の虚妄よりかくもする。御ふふそのかをえすと。とくして。空虚のよゑ流疋けうみど。そへとひよする。ハいと。空時。もべて漢書は史法小化。書はすと。そへは後のおわだす。け一ツもあへはかるべし。折からぬともかくのやく。うれくる。このまうすが、えよきもくこくもく

て。むすめは是れ正一とあともひ伝じて、うりて皇室の事
き古傳をば疑ふはう事もなき。但一漢籍ハちく皇國の書ハ
かくにくくあれ。いくく後みてて。今傳つところあるまも和経書
老のは生まく。日本を紀すば。かく書と取こむる文多べ。そ
きよりあらも古文ふるくもつとばんやれた。それも仁德履中の店
せ以來かとじ。能とばそれより以あの事記せよと。文字書
籍の取まざれば伝じかくことぞ多すむ。能れどこれは
一からいは見解を今かくもさうめの。まわハ皇國の古傳
も。古語拾き序ふ。上古之世未有文字貴賤老少口口相傳前
言往行存而不忘と云ふめく。文字取り一そは。は傳とて傳

ヘーネタ。基レノ詳小全くして。やくふ古籍かきうつた
うちもまたて伝ぞべにす。かくしても假かびの
う取とるとは考れ也。文字公用ひられて。何事もそれ
ゆづゆ。後の事のひきてやうとは。たゞうごくとおべ。又日本
紀の文はるハ。おそれ古事記傳の首巻に委く傳ぞうめ。撰定
の手を續とくむにてやうとく。文よつとし新へてやうとく。文
ハ文と別々立ふさて。古事記と引合せ。古事記とつまび
くに令ひきとく。神代の事もまつとふ誣ぐく。に傳へのふ
一く実取り一ことを。おのづくもほとく。その時ふれりも
ぶりてかくがくね伝じがくねりも。おせづくもとくべ。

先き代世人いまくかうぬとてうの惑ひをえまぬれど。ちるヲ記
日本紀をまことにとく解ちもつとけハシムラ左ふ。古傳を疑
ひく。アテカアヌミをだ伝ギムケリ。

言語

本邦の言語。古訓共々異邦より移アキアリ。和訓ヲ
ハ經^{ヒヨウ}は説アキアリ。十ニハ九も上古の韓^{ヒン}語。或モ西
土の音乃移^シル。

も^シてけ論者^{シム}。はるうは上代也。け由^シ六人^{シク}も取^シて。い
はゆる世人^{ヒト}終のめく歌^シヤー。韓^{ヒン}より移^シアサテ後に人^{ヒト}生^ス來
ル^シと云ふ。又人^{ヒト}より云ふ。韓漢^{ヒンカン}とは來せざり

一以^シあひ。主^シべてやもいもひ。暗^{ヒシ}の^シとて^シアリ^シと^シアリ^シ。や
モ^シ一^シと^シアリ^シ人^{ヒト}。行^{ハシ}、^シ人^{ヒト}みを^シいも^シア^シ。居^{マサ}、^シ人^{ヒト}。お^シづ^シ
の^シ達^{タリ}、^シア^シ論^シ。總^シふ今^シ之^シハ^シみ^シ異邦^{ヨリ}アリ
耳^{アリ}。と^シハ^シ形^{ヒコト}音^{ヒコト}。又^シ音^{ヒコト}ハ^シ漢^{カン}字^シ音^{ヒコト}アリ。字^シも^シ
カ^シと^シアリ^シ。御^シす^シア^シめ^シと^シ論^シ。されど上古^シは字^シの
言^{ヒコト}と^シか^シ。言^{ヒコト}字^シも^シと^シア^シハ^シ後^シの^シテ^シ。又^シ訓^{ヒコト}と^シ皇
風^{ヒコト}を^シいふ。皇風^{ヒコト}神代^シの始^シ。アリ^シハ^シ之^シ皇風^{ヒコト}云^シ。アリ^シ。
多^シで^シく^シめ^シある。さ^シに^シ神^{ヒコト}の戒^{ヒコト}教^{ヒコト}言^{ヒコト}と^シ日^{ヒコト}。論^シア^シハ^シ日^{ヒコト}。
但^シ一^シ神^{ヒコト}と^シ神^{ヒコト}は^シ、^シま^シて^シ以^シ來^シ。教^{ヒコト}言^{ヒコト}中^シア^シ。但^シ一^シ
三^シ神^{ヒコト}の戒^{ヒコト}教^{ヒコト}は^シ、^シま^シて^シ以^シ來^シ。論^シア^シハ^シ日^{ヒコト}。

之を教へば中々ある。全く漢字ある物も韓語あるも。あまにあら
ば多き。多く多くハルヒトヨリハ宣ふ言たるを。あひて皆緋諱
なりといつてゐる。あまにまれずハラヒトヨリヒトモ。ノアまれ
を引出で説いて。子もあほる能くとせむち牽強がある
すや。殊ふこうおせむる言ごとの説も。鹿を馬^{アシ}といひてより
も甚一。又教子云の中に。代風とあのづく似るも。口へねも。ど
うまく。又古韓の風く。多く皇國の服属へ。車づれば。そ
ね小は車をけく。たゞひふけ方すも彼方に。もぐり。より
居る一人も多う。あふ。衣冠は形^{アシ}。衣服器財風俗
ある。此方より彼方へ。うづりあふ。も多う。とんでも。そゆと

まうゆうて彼^{アサ}は學^{アシ}は移^{アシ}すわともゆう。ゆく思ひ^{アシ}がこと
なり。但^{アシ}一主教^{アシ}をもとあひて彼をかえども曲^{アシ}ふを論者^{アシ}は起^{アシ}
たり。折^{アシ}皇國ハ。文字を始^{アシ}して。後^{アシ}天^{アシ}下^{アシ}の制度まで。あく
か^{アシ}様を用ひ。か^{アシ}人の心^{アシ}おとくか^{アシ}お歎^{アシ}める有^{アシ}。上^{アシ}うい^{アシ}ま^{アシ}う^{アシ}じ^{アシ}あ^{アシ}ざ^{アシ}り^{アシ}以^{アシ}あめ^{アシ}うまで。たゞぐく後^{アシ}
の格^{アシ}を以^{アシ}て推^{アシ}むとす。は。か^{アシ}よみ学^{アシ}者^{アシ}は癡^{アシ}。か^{アシ}異^{アシ}風^{アシ}と似^{アシ}
くも^{アシ}のう^{アシ}派^{アシ}り。み^{アシ}か^{アシ}れ^{アシ}か^{アシ}ひて移^{アシ}すわ^{アシ}そとい^{アシ}。多^{アシ}獸^{アシ}あ^{アシ}の^{アシ}い^{アシ}も^{アシ}。口^{アシ}耳^{アシ}鼻^{アシ}まで^{アシ}全^{アシ}く^{アシ}口^{アシ}に^{アシ}。か^{アシ}くも^{アシ}と^{アシ}漢^{アシ}尔^{アシ}お^{アシ}ひて^{アシ}作^{アシ}き^{アシ}る^{アシ}わ^{アシ}と^{アシ}せ^{アシ}む^{アシ}。又^{アシ}も^{アシ}そ^{アシ}の^{アシ}始^{アシ}ハ^{アシ}か^{アシ}く^{アシ}の^{アシ}來^{アシ}く^{アシ}う^{アシ}御^{アシ}る^{アシ}。

取る。其の獸も其とハア一こトウアヤマホシ。草木もかゝる
の経をまよひもろめてもと強説せむとまもと。山川みどりハ
ウ。これももととかのヨリ起ふのせては、びりて、といとも
ウ。ヨリハベレ。殊の云説ハ、あまおのく異形。そのほつ
やうも又名異あらゆもの。その例とニイ。皇國モハ形を
名。聲を喰。言代為^{スル}ことキ一あざりふ。漢語モハ元形聞
聲不云矣。考とやうに。財用をさうけま尔い。諸の言々多此格
あり。毛軒と異なることを。それ爾准へてかべく。又餘乃
あくねえも。おのく異ねると准へてあるべ。これを説きる
國々の自然往来にて。他よりかうばざる時後へ。かく思ふと化
じる。人をまとひとすよといとをこぐ。

姓氏

國外諸姓。主元三韓の官名及乎云説又考る多し。
是又上古ノ邦也。其ノ官職を用ひてと一姓と
考べ。

諸氏の中に。韓乎より移り來る人々の子孫の姓戸も。やがて

その本の官職をどどとくわざも取まふにござれ。むと
よりは皇族の人の姓戸ハ、みまをすり皇の地名又はその職名
とふすとくあひて、姓の官名あるべくゆれりの事とす。
先の小兒とあらか姓より出づりと也。例の左の昧きある。
はく後^{レヒゴト}お。さてこゝる舉^{スル}連縣主直等は姓を加姓
す。これかふえをもとす。あへた字あるを。日中紀^{カハ}これ
をも姓と書^{カハ}きとれ。姓と別^{ロカ}ある。後世また戸字を借用
て。姓と別^{ロカ}て。佐伯^{カハ}との中へ出^{カハ}すハ第^{カハ}べ。さて加姓称もみ
すをより皇の言にて。各も義^{カハ}なる^{カハ}。例のみす
姓の官名にひてむとせ。いとく近^{カハ}を取^{カハ}附^{カハ}く。

一ノも似つ^{スル}じと取^{カハ}し。詣^{カハ}うれを伝せし。又宿称の義と
釋^{カハ}ひすごとく少^{スナキ}兄^{スナキ}。又皇子に大兄^{オガエ}とすに名をこれ^{スル}。
こゝもとよりみる皇國^{カハ}。大と少とを射^{カハ}て^{カハ}。例を云
ふ多く。兄と少^{スナキ}称もつひふ多^{スル}。いとく他^{カハ}を取^{カハ}くとせむ。
そのうち麗^{カハ}の大兄^{スナキ}の子^ハ。すと魏書の^{カハ}の傳^{カハ}。其官
名有^{カハ}謁^{カハ}奢太奢大兄小兄之號^{カハ}とひ。北史^{カハ}公有^{カハ}大對^{カハ}盧^{カハ}太
兄大兄小兄^{スナキ}凡^{カハ}十二等とい^{カハ}。大兄の上^{カハ}謁^{カハ}奢太奢或^{カハ}大
對^{カハ}盧^{カハ}太兄^{スナキ}。先^{カハ}を皇^{カハ}に^{カハ}て皇太子皇子など
の有^{カハ}。その謁^{カハ}奢太奢大兄小兄之號^{カハ}と^{カハ}びて。次^{カハ}ある卑^{カハ}大兄
の称をあらひ取^{カハ}りへきやうす。うち麗^{カハ}の官名をあらひ

日本トミ。又トニタノ称をとリム。

國號

日本の事。西土の書に考フ。重以の去ルニシビ。ミ日本紀を以テ上方日本ナム字派用ス。みを退紀アリ。トカベシ此論をまーとふ。シテ。但一カは。ヨリまで。シテ。西土の書を以テ考ヘ。け方の古ムニ考ヘ。シテハ。いう。ナリ。記ル日本といふ字。アリ。化を名フ。ナハ及リ。ムラニ。又重以前といふも。シテ。隋以あと。そツベレ。重れ事也。ユハ。日本。ト。シテ。特。号。メ。シ。已。シ。紀。小。國。號。考。一。毛。河。論。著。の。め。く。左。尔。昧。考。ヘ。尔。ハ。詳。ア。リ。ト。ト。カ。ベ。レ。ニ。シ。テ。後。ニ。考。ヘ。

倭大倭大和養德み多や。まよ。訓。ぞ。萬。德。と。考。一。ト。考。ア。ミ。バ。や。まと。ハ。倭。奴。の。將。被。ア。リ。ト。少。ゼ。シ。大。倭。大。あ。み。ど。出。る。を。ハ。お。不。や。ま。ゆ。と。す。ひ。る。く。シ。テ。や。ま。と。シ。ヒ。シ。大。字。を。加。へ。て。う。ち。例。ア。施。了。ト。シ。ヒ。シ。ト。モ。や。ま。と。訓。を。シ。い。つ。ハ。例。の。古。よ。く。シ。記。ア。ミ。ア。テ。倭。和。等。字。の。多。モ。号。考。に。委。く。い。つ。リ。や。ま。と。養。德。と。ち。レ。聖。武。太。皇。の。所。時。ト。シ。志。ハ。シ。く。の。方。行。ア。リ。ト。モ。之。の。始。終。殘。日。在。紀。ル。又。シ。テ。先。ト。シ。音。ね。仰。る。美。字。を。揃。て。改。免。レ。ア。リ。ニ。ト。モ。行。き。シ。テ。シ。倭。奴。の。將。被。ア。リ。モ。美。号。派。立。シ。モ。ト。テ。倭。奴。を。

ノ。名を取るにむあへ。傳者とハ聖武天皇の時代より、下
撰ひきし字がることを考へたり。例はみづくよ。す
り。又倭奴れども。ちうり大ふ得りあり。その下へ駄戎
慨云々辨也。

本行をりて本の事。大行をりて火の事。と云ひ古
也べ。主名号古虫ふるくま。後世あづけて近記
くもや。始よりけ名だるふり。據伊弉忍穗共爾居西
千の將もももの形と云

天下諸國の名又郡郷等の名。いづれも皆いとゆる。とて文
字ハ後かつて書くめにて。正字もとあると云ひもと。訓と傳

きてもみて讀く。字中に字焉を傳用ひしや。地名も
一種の移行り。見て地名字焉と見ひしも。みず假字に
て。字ふきハ假字と云。能く傳者のいふとこう。漢書の例の如く
名と字と紙一フルに付する。その字をもって名といふ。皇
帝の古虫尔昧きこと。本國火虫のめきも。後又ハ紀伊。肥。虫と
虫。よへり。し。よ。う。れ。う。虫。有れ名と字と。別ある。お。て。
名。い。字。に。ち。か。り。ぬ。と。き。ら。と。も。べ。ー。されば餘の。ま。名。も。み
る。字。ハ。後。の。近。記。あ。れ。ど。も。名。を。本。國。す。き。と。け。紀。國
肥。虫。了。准。じ。て。か。べ。ー。こ。か。う。ハ。い。と。よ。く。か。き。く。ま。す。う。ね。る。に
ねえ。と。記。ま。く。ぬ。名。や。う。へ。も。く。古。虫。く。れ。と。と。又。伊

皆忍極ごんごく。ひふかともあらぬをこなすと始よりしてい
くなかげ居西子を引出で。汁もも菜にも者も用ひる
こそいともくとつゝれ。

容飾

上云文身黒齒被髮ごは。文身いつきの時小禁せうきんせず
を知し。履中紀ひきゆうすれば。應祚仁治おうくくにんじの朝あさ止や先さきり
一那いつな年ねん

上云男黒齒ごく。所見しゆけん。かくかく又後ごの云いハ接せつとす
るふぬふぬ。被髮ごは。考かうへき事こと。多く又多くに緊要きんよう
の備そなへす。されば畧はり一つ。黒齒文身ごく。上云既既お辨べん。

アリ。履中紀ひきゆうすれば。玄くろとハ。黒齒ごく。彼紀ひきに文身ごは。
考かうふへるふへる。黒齒ごく。阿曇連濱子あみれんべいこが死罪しじを宥ゆめて黒くろ之の
す。又飼部うきべの黒くろ氣きを。浮城島うきじまに坐すわ。伊弉諾いざなノの惡おませ路じ
ふすりて。飼部うきべを黒くろと止やひや。履中紀ひきゆうすれば。お
ねをいふねいふね。それどぞれの事ことハ因いんりて。上古じょうこより 黑くろ
面おもても黒くろと。玄くろと。考かうへく。いふとと。いふにに。り
黒くろをはく。上古じょうこより。その風俗ふうぞく。死罪しじを行おこすべき
不ふどどの言い。黒くろ。これふくらくらへきふり。ゑとと。既既ふ
無む神じん仁じん使つかの古こ。止やられ。それと。行おこいと。近ちかき。お
き。上古じょうこより。風俗ふうぞくを。人ひとと。あはれ。耻辱はずとも。あはれ。

ひれを。又上古より近代までの風俗をもよハ伊弉諾神いり
でう、其氣とふくみ能くも能きハ二ノ火事トモりて。黙も上古の
風俗からずり一ノ火事トモリ。飼部城黙セハ別小
ゆゑ也。一ノ火事ベ

衣服

上古衣絹とす。千早乃是也。千早の製一條絹布を用ひて。その横幅は中間を裂て。頭を牛耳。また端を牛耳。弦末毛小野妹子入隋みよ是を著一り。一りとアリ。千早といふ眼、ちよふ口もあつと仰。先と上古ふうあれど、着一り。一りといふ。例の論者め妄説。和名抄亦本朝

式禪禪禪讀知波夜未詳と云ふ。未詳とハ此字清少ナ
字書にも行ふ。又ちもやと訓を絶
ひきにまれ此也。今論者のいふくめきわゆる
は天武紀より禪をまへもとよりそり。前裳は謂あるべし。但し
先をもちらりと訓へむ。ちくわゆるも。中古以来巫祝の先
まも千早といふ。上古より意須比の先製衣にて。その
着はぬかとハ言ひて。意須比はもとど論者ハ言ふよ
ぬうべし。さて上古の衣を千早せむといふ。例の如ふ
に男衣皆以横幅結束相連女人衣如單被貫頭而著之とい
ふが故とて先を著一も体。甚だ苦れた圖を作

一。チ早の製^レといふ。皆^レ後て宣^レをいやめかとさ
む^レ。先^レは妾^レ。妾^レ。ちもやも^レ。襲^レ。よせ^レ。服^レと^レ。ア^レれど。乍^レ制^レ
豈^レかくのめ^レ。モ^レや。抑^レ。備^レ者^レ。須^レ佐^レ。之男^レ。食^レハ韓^レ人^レ。神^レ
武帝^レが^レ。古^レ父^レ。吳^レ泰^レ伯^レ。裔^レ。とい^レ。ふ。そ^レの^レは^レ子^レ。も^レハ行^レと^レ
韓^レ衣^レ。吳^レ衣^レと^レ廢^レ。裸^レ躰^レ。同^レ。あ^レ。す^レ。早^レの^レ。を^レ着^レ。絶^レへ^レ。も^レ
一^レ韓^レ吳^レの風^レ。うつり。い。のうみ。す^レ。韓^レ衣^レも^レ吳^レ衣^レも^レ。と^レ。也^レ。
を^レや。後^レ小^レ尾^レ口^レ。れ^レひ。も^レぬ。とい^レ。ハ^レ。備^レ者^レ。の^レ。す^レ。と^レ。下^レ文^レ。ふ^レ。意^レ。神^レ天^レ皇^レ
け^レ時^レ。す^レ。君^レ。始^レめ^レ。韓^レ衣^レ。を^レ。き^レ。り。と^レ。自^レ。ほ^レ。あ^レ。ま^レ
お^レ。遠^レ。せり。い。妹^レ子^レ。が^レ。階^レ。尔^レ。ま^レか^レ。り^レ。ハ^レ。推^レ古^レ帝^レ。廿^レ年^レ。

それよりま^レ十一年に^レ。十二階^レ冠^レを^レ。制^レせ^レ。れ^レ。う。い。く。て^レ
備^レ者^レの^レ。い。ふ。チ^レ。よ^レ。け^レ。お^レ。じ^レ。め^レ。の^レ。を^レ。着^レ。せ^レ。そ^レ。異^レ。ハ^レ。遣^レ。そ^レ。べき^レ。
これハ^レ階^レ書^レに^レ。男^レ子^レ。衣^レ。裙^レ。襦^レ。其^レ袖^レ。狹^レ。小^レ。云^レ。頭^レ。亦^レ。無^レ。冠^レ。至^レ。階^レ。其^レ王^レ
始^レ制^レ。冠^レ。と^レ。と^レ。と^レ。わ^レ。は^レ。く^レ。て^レ。い。ふ。る^レ。べ^レ。

後^レテ^レチ^レ早^レ。尔^レ。禪^レ禪^レ。の^レ字^レ。絶^レ。ふ^レ。子^レ。よ^レ。を^レ。見^レ。背^レ。の^レ躰^レ。及^レ
そ^レ。江^レ。を^レ。かけ^レ。く^レ。め^レ。モ^レ。小^レ。候^レ。用^レ。る^レ。が^レ。ひ^レ。千^レ早^レ
振^レ。神^レ代^レ。と^レ。ふ^レ。始^レ。す^レ。

和^レ名^レ。妙^レ。尔^レ。知^レ。波^レ。夜^レ。と^レ。う。禪^レ。一^レ字^レ。訓^レ。か^レ。て^レ。禪^レ。^{タヌキ}
別^レ。あ^レ。と^レ。も^レ。す^レ。じ。を^レ。う^レ。け^レ。く^レ。め^レ。か^レ。ふ^レ。と^レ。大^レ。ある。お^レ。遠^レ。
も^レ。べ^レ。備^レ者^レ。が^レ。説^レ。かくの^レ。め^レ。疎^レ。漏^レ。多^レ。し。ふ^レ。つく^レ。べ^レ。

又すよあす神代とけよんといふ。腹をかへて巻ふべ。行
を取りて引出で禮摺スルサムとももかく。うる稚チキ子
紙シといふ。被ハシマハシモ振フリモモバレ。因のめくにてハ行
をあり。尔カくにくこまぬべ。まく袴スカートぶつれて諭者
のけ候の説アドバイス非アヒいも。振タテ袴スカートも。神代より膳羞の
教タチ又ハ供神也をとりまうす人ヒトは拂アヒるわすて。古諺忌幼
は弱肩ヨコカタに太袴カタタケとトかけといひ。祝初スルカニも襪タスキ拂アヒる伴カノニの膳タシ
也。景ハカ紀カニ磐鹿ハカニカニ六鷹ロクタカの蒲カヤをきて半纏タスキとトて。膚トボスを化
也トシ進アシテ。身カラもあくまく。今ナウお食エサシを食エサシをとトま
まうなナ。者ヒトせざればかくは。曰ドう。すれハ生リきもそもの

供神物食エサシ。袖の觸タケむことと憚アヒり恐アヒくて。袖をかげ束
もろくも免カツは拂アヒるわ。り諭者カニのリ小布ハタのリ小布ハタのリ衣
がリふ。袖タスキは袴タスキをかくべに由アリ。是ハシマて上古
の衣アヒ神ミコト一ミツを効アヒべし

歟福寺縁起に葬礼の古アヒ。土地を掘アヒと又墓を
治アヒる人ヒト。千早チハシをもとむ行ハシマ。其後薄サガ魏志晋

出アヒる。小コトちろけコト

この後千早チハシといひて。古アヒ衣被アヒのリ小布ハタハ例アヒの強カタ
とト。これハリ墓地を塙アヒとて。土泥に様アヒじゆアヒと避アヒて。古アヒとト小コト神ミコトもかく短アヒをもとむアヒ。今ナウせ

とても葬の壙を塙者をと。かくぬきをみるを。是も
今のせりあての衣服の例として可取しや。

彦神帝は縫女二人を貢ぜよ。始て君臣韓衣

を着あり。後もとも庶人引ひとく裸形あり

一とぞ

縫女を貢せ。ハ。お縫ふ。マテの巧うる女を貢せ。これ
より以あ。裁縫の制取り。に。う。ハ。後雄略帝
は十四年。平。ハ。是より衣縫女を貢ぜ。これを以て
彦神帝の内附。裁縫の始元に。ひ。す。し。る。を進
め。ベ。も。と。す。り。此。方。ふ。も。す。取。う。於。ま。す。き。う。行。き。も。

韓。す。を。先。す。れ。こと。い。け。外。計。事。を。例。く。海。東。諸。國。記
といふ。鮮。の。書。に。皇。天。の。す。大。を。い。つ。天。皇。代。序。の。中。に。
彦。神。天。皇。十。天。本。始。制。衣。服。と。記。す。も。此。縫。女。れ。ア。リ
志。す。を。得。ア。シ。い。く。天。皇。代。序。ハ。も。べ。後。そ。の。年。代。記。や
う。れ。俗。ま。を。取。て。紀。せ。る。の。そ。そ。う。る。彦。神。天。皇。は
古。時。す。り。既。て。紳。衣。を。そ。そ。り。と。り。か。も。後。ハ。唐。服。を。用
ひ。き。一。に。准。へ。て。が。は。か。り。余。い。つ。あ。る。そ。何。の。授
も。れ。に。あ。と。く。日。を。決。釋。と。く。引。き。う。れ。或。記。の。こ。じ
ゆ。こ。を。す。わ。き。

河。内。國。ス。ル。歎。山。中。古。塙。尔。土。物。一。枚。を。塙。ゆ。そ。ミ。神

左袴被袖左のめ一圖

土物のくみぐひも。とく人のたよきけ形を造りままで。衣被めどのかまうあるまゆで。くはしくハ造りそくへきにあらうけきば。往とももにあらうべ。今のかまくも残離カミギヤトるどり。あをくよ。衣被はくゑ甚廉カミうて。袖スリふあれどくや。古の土物をとひやくべ。ちきどくに舉くる図を見る。またとく上方の衣被の大きさのまゆは。笠スリふぞ似シむ。但し裁縫韓服ハタケと似シくとて。必彼カレを取スルとぞくハ非アリ。ちくて衣被ハタケは。いつきはくも大袖オオスリを似シくす。あられ。おのづく緋ヒと似シくするもとくべ。又韓吾ハタケをもとく。

もとくべ。いさく一偏ハタケよりふべくも。首飾のゆきを笠スリふ。トテ左袴のゆかの内ハタケは土物のくみぐひ。而くは石人シロヒトも。古くは多くハ多く左袴ある。續日本紀に養老三年二月初令天下百姓右襟モモとひと合せて。思スル。これよ以前ハ庶人シロヒトのみ左袴ハタケ。多きひ。折衣服の制令も。持古天皇カシタツラは時より見て。はそくを捨て。次第尔摩ハタケの制ハタケ。お統天皇カシタツラは。百姓の服制も。に。之後養老シロヒトまで。左袴ハタケをハ改ハタケ。されざり。すハあらうべ。先ハタケよりて。思スル。に。漢國カシタツラも右袴ハタケ。左袴ハタケをハ夷狄カシタツラのゆといやーし。もとくあれ。よくそくハ寔スル。

いづきをうへたるうへたるむべにすすふらへば。されどり
あまみの左袴あらば。うねりて左袴にて宣へき理あること
聖べ。諸の異國の服みる左袴也。又乍ら右袴の國も
けらん。あぬれくいかれども。化もといふもの有り。皇國の古
元袴あり。かくは皇祖太神の定先おき給ひ正へに
制ありて。かくは既へきり理をうらしうき。かくて
あまみの左袴あらむに。ちゆつと一服のみ別る右袴
あらへにす。されば。薄も共に上代を左袴ありしも。聖
人の智術焉。むどうり右袴不改めて。化もと異ねけぢ免
をあへて。己がまじ申候。化もと夷狄」といふもとと

聖へたるやうべ。純乎其中乎。右袴夷狄ハ左袴と多くべき
ゆゑ。あきよテ取るべ。いそゞ先ふからんべき。もとてかの國の聖
人とよりのハ。かやくは新作を取へて。天下後生代あらず
もたぐひいと多。純乎を後人との右袴あるを以て。誠
子中あるをうへ。とぞひもふとぶり。後ふくかの國の
風をもとひ取るべ。左袴又改參るをきて。今ハ千有餘年左袴不
形をうへ。今ハ書老の時。改參るを。今ハ千有餘年左袴不
風ふと。左袴をうへ。左袴もいふと夷狄乃
あも又左袴をいふと云ふべ。穿え行きを正へ。人の

ひかりて定むべきふりも。仰本も皇祖大神の定めをき
きく。室園の制。まことに正しくふりとされ。左の左祖
を耻のめくらふ。あらは。ほふふをつゝ。後世の心。

喪葬

此はみるを替の説く。たゞ、く論辨うるをも。うより事
もくがれば。うるは黙りつ。うち説をゆめむとあらば。
尔向へ。きぬべし。

祭祀

天照大神槍を以て身を傷めし。石窟陵の前
尔於て、天鈿女俳優とあり。されば又辰持より作る巫

核子は身を傷ひて神^{カム}ざりま。ハ稚日女^{アガルナ}もあを。天照
大神^{トヒル}といふ。かくはやく古傳を私^{シテ}よ乱^{スル}ていた。行^{マサ}
いたれざるも。又天照大神のあぢくち^{トコリ}と坐^マ。
石窟^{トキフ}を陵^{ミコト}とひふ。そも^ケ大神^{トコロ}ともみうち今日までの
行^{マサ}りあましくて。は海^{ミタ}を照^{マサニ}。日の大神^{トコロ}尔
ま^{トコロ}。常^{トコロ}にま^{トコロ}ます。辨^{マツル}をま^{トコロ}。古傳昭^{マサニ}
る也。続^{マサニ}。近^{マサニ}をまさか^レに学者。例のかづぎ^{マサニ}は小理^{マサニ}
取^{マサニ}みて。これ伝^{マサニ}と云^{マサニ}い。しき土^{マサニ}尔^{マサニ}上
古の人^{マサニ}と云^{マサニ}。もく^レ臆度^{マサニ}の妄說^{マサニ}をいひ。や^{マサニ}もすれど

峯浦とよし。山陵のそりを備むる。いともかくあくゆ
一き狂云え。一け大法神祭燒ましまるむる。天地と
黒闇とありて。たちまちせせ世とゆうびせぬべきものも。
うかごく。又天鉗女の俳優を辰緋より候ふるを俗く
よふ。俗の章流れ慕一き。辨をもくべ。

神籬を比毛呂岐と訓むる。わと新死の辞みて。
それを假て用ふり。殯歎韓を比毛呂岐。天日槍
が携へある。熊神籬も。その父祖の主あると云べ。
殯歎韓を比毛呂岐とハ。例のさうふ授あきことヒムとヒ
モと通じ。レとロと通じ。かくとひよのく。妄說ふ。もくべ

誦者の附含みをかくのめーが、はつとをひいて。そのゑん人
をまとふ。さむとももむかと。いとくらす。熊神籬の
すは。性年或人け名を疑ひて問ふ。答へて。考へて。や
むとぞふ。人と別ふ。ゆべ

磐境ハ墓をいふ。もく磐境の字はも波安加うれを。
又つひよ墓字の訓とあひて。

又例の妄說く。こそ下文ふ引出で古事記の婆く迦本と
強て墓け本の義とせむとて。思ひよれる附含み。そはイハ。
サカのイハを上思ひされば。とあり。サカのサカアと模倣の
ああかく妄よこれを磐境の字あるといひて。ゑん人を

行きむるよりのく。かへりを知識行ふむ人。かへる陵をうめる説
を詣うハ伝せし。

天照大神清陵。日本紀以下に記す。據ふ當時天照大神
皇居大御宝市御子らること日本紀より依て知べ。此
事も葬事也ゆゆ也。化事アリ。ヨリトモトと知べ。御刑
御ノ記せし。あ小天玉山を天隱山ともす。おそれば。天の
隱山也。天照大神の古陵。アリ。と考へ。殘古集
尔え。神武紀に云

神別記といひて近世傳化を云ふ。天照大神は故ハキアミ又
といへど。或人天祖都城辨といふ書を著し。これを破し

て。大神の故名大和御くといひて。繪々と禮を舉へ。を。あのれ又
を非を辨じて。天祖都城辨くと取づけて一巻。今論者の少
と云ふ。多くクナ。或人の説ふ教せし。あ小天玉は辨ぎ。此
太神神尔は陵けすをつぶ非あ。すともあく辨えにて
又。あ小天市御又天玉山。天玉ねす。市香山と擬
シ。もく大和御ハ後小室居するべき。神代アリ幽契
行り。一。越。はるに。アリ。天玉山。と。ハ。神武天皇。以あ。よ。ま
既。おけ。名。と。ア。ア。又。天玉山。を。天玉山。と。ある。お。お。ハ。ア。小
室。居。と。ア。天。玉。山。の。グ。ハ。湯。あ。山。ア。ア。ア。お。湯。湯。も
古。玉。ハ。精。嚴。あ。を。混。諸。一。て。リ。お。後。そ。の。傳。解。ア。又。殘。古。今

集を引く。かくふをもとめし。後まうはりとよりや
うほの花とすふあらざる。にげうけと。國古記ふ此山
たよりゆきりと行をよむるにこそひき。又神武紀尔
ちみ事のめきい。天上の靈區を擬へる山あらがふ。

和歌

捕ふ八重の旅素や鳴きの古詞されば。三十一字とも小辰稀
の辞あること知べ。王仁難波はおもも是れ同く。
難波はふといふハセ邦の地名。嘆やみを以下。みす百海の
詞あること知べ。されば文字の多寡小よし。うは韓
行古俗歌アとゆう。

け條みどり辨ちるにも及ばず。すき活説くとハ。ものれもよく
ひむつべ。但し取ふはばのうと。坐。王仁が作といふにつきて。い
さく絶ひをあと人もうむ。かのう王仁が他よひうべ。後の人の
他よひと絶ひあ。さてえハ。きく詞も。その時代くわゆを
きそ。うきうひ。うきあうに。けうハ決して。意。神仁法の古事記
は風調ふり。もううよ後のにつくられば。うきうひ。うのう
えそそればといふう。延喜の日を紀。竟宴の時。平大内れあ
のをう詠きる。あると。仁徳天皇の古製。くといひ傳へるた
ぐひよて准へ。といひ王仁。うに。もせよ。うき。うふ。ありて。二
十年。おもひび。うき。うふ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。

ひせてもみそりとせしも行ふうらむ。又須佐之男命を
韓人といふも。かとより諱者の私事にて。ちく小姓もおき
る。されば。ハ季は辰巳の辯とつも。辨を費むふもゆべ。

國史

日本紀とよもよ。先此まけたハ辰馬の二辯よりい
け。かくも弁辯はすもあま。うるとんじ。それを見
すをばへてよみざれど解へか

け教言みて。備考全般の惑ひをみづく解り。さよをうなぐ
とあり。富士山の上うらを先ハ。前日せむる。阿弥陀山三尊は
古來遠きりとて。かの山ふねむる人多まらず。解むとく。信説ふ

まどす。人目ふ。ばいうちもかの三佛の形はめぐらやう。今。諱者
の見も。われよ同じ。日本紀をあくべく三佛の古本遙くとんじて
見る。あふ。さくべく三佛の古本遙と見る。よことふ能る
べきと。日本紀をべて。像の潤色多く。卷首に古。天地未割え
のぬぐひハ。全く。洋籍をとれりといふことを。誰うちれを知
ら。かく。此ののうによりて。疑ひとあすハ。尊。西行學考の見
解みて。先づしかば。又。ゆまとわばの似て。も。うらふ
おりて。疑かも。いまざーかとく。おのづか。似て。も。有合せ
は。うらも。かどす。似て。疑が。佛。まよひ。從よ
似あること。多矣。古本を詳る所。をみて。

古事記とおゆ一てよくそよどむ。うへかへたるもすく。解せ
ぞといふこと。佐三翁諱者三翁より起ると云ふれば解し。か
ーと思ふ。古事記昧くして。古事記を解くもすと。うへた
と。解きふ。古事記草紙に注釋につけてあるが。とくに解
きを解く。考究する。あたる韓語ひづけと。かく解
て。いづくとも。注傳と。タテ。と。かく。章後附今解
説を取つて。みづくと。を。ゑ。と。矣。と。の。儀。と。ある。す
れをまつ。いふふもれり。又まづて神代の事と解ふ。みす漢籍の
小理。小溺きて。おのが小だらう。もと。先と。もと。が。な。げ。漢籍
の癖を清くはあれ。一。と。び。古事記入て。古事記。おゆ

めう。あのづく。疑ひと。みる時。ぬべに。わを。

古事記の序に太武帝

乞ハ。まつと。小。り。ね。諱。之。能。也。諱者。の。そ。ね。き。と。い。ま。る
異。く。も。ト。一。古。事。記。傳。考。二。卷。に。い。る。と。考。へ。て。知。べ。ー。又。序。に。かく
けめき詔命の行。う。と。以。て。け。記。の。正。實。み。て。虚。偽。あ。れ。る。と。達。を。べ。
姓氏緯序から三韓蕃賓称日本之神亂

北文の。こ。ち。左。二。緒。も。帰。化。せ。ー。人の。よ。緒。の。先。祖。を。傳。ま。る。
皇。天。大。神。の。傳。ま。そ。と。い。ひ。よ。せ。ま。ぎ。れ。れ。ま。ー。を。い。か。く。能。る。を。
諱。者。こ。れ。を。逆。ふ。と。う。取。り。て。さ。や。け。ま。ま。き。け。り。る。も。か。と。須。佐
之。男。宇。の。韓。け。人。あ。ま。と。と。掩。む。か。く。ひ。より。起。き。う。と。い。る。例。乃

強トシ。又アシカシのミサカヘタハ須佐之男命を。日本紀ニシテ記シテされ
くムカシよりトシケル神ミツコトとヒト。新羅スルガへヨリ移シテかの國クニに
いマセるル行フ子孫ミツコトとモ同ド。御ミツコト也。而シテ辰タツ神ミツコト
主ミツコトとモ。性ミツコト授シテ。かトもアシカシぬシテ取シテ也。

應神帝ミツコト取シテ也。

此天皇ミツコト取シテ也。何ナニ事モノもアシカシ。方カタ記シテ日本紀ニシテ仲哀天皇ミツコト子ミツコトとモハシテ
時タメ。施シテ小ミツコト。神ミツコト今アシカシ。上の皇ミツコト統シテ條ミツコト。けシテ者ミツコト也。子ミツコトと
いうル。疑シりト。仲哀天皇ミツコトのハシモト。傷シテ。實ミツコトの
故父カミコト也。而シテ。仲哀天皇ミツコトのハシモト。

行ハシモト。近アシカシ狂カミ儒カミ也。經カミ。而シテ。かト。不アシカシ也。もアシカシ。彼ミツコトをアシカシせシ。もアシカシ。吾皇統ミツコトのミツコト代ミツコトよ
莫アシカシ。せシ。也。而シテ。行ハシモトをアシカシ也。而シテ。もアシカシ。彼ミツコト
とモ。かト。邪ミツコト。巧アシカシ。出シ。也。そシテ。日本紀ニシテ仲哀天皇
九年春三月五日カミガギ。崩シテ。まアシカシ。後アシカシ。邪ミツコトのミツコト始シ。先シと
して。而シテ。九月カミガギ。皇后ミツコト開胎シテ。而シテ。生シテ。懷姫ミツコト。八年の十二月カミガギ
生シテ。又アシカシ。後アシカシ。魏志ミツコト。十一年カミガギ。十三箇月カミガギ。而シテ。くれ
鬼ミツコト道ミツコト能シテ。以シテ。妖惑ミツコト衆ミツコト。於是ミツコト共立シテ。為シテ。王ミツコト侍婢ミツコト。千人ミツコト少シテ。有シテ見シテ者ミツコト。唯シテ有シテ
男子ミツコト一人ミツコト給シテ。飲食ミツコト傳シテ。辭語ミツコト。といフ。この男子ミツコト一人ミツコトを疑シテ。とモ

接とまう。たかくの外ふ景りとつべたるし。拝山父
天皇の像ふ祭び。神の店とがんふよき。又懷姫十三箇月了
して生る。今もうるすて。先づしかば。神尔此時はほ
行多をみる。神のうとねはまひあれど。さうに凡人のうとを
りてこかくやべるふらうば。絶るとうれほ籍ともに。事鬼神道
能以妖惑衆あどい。戎狄の人々。乃常め小程ふまづて。皇
神の道け靈異アヤシたりとぞりをもよごす。あふけ皇后の神の店ミ。小
志シテ。齋祀をあごそふ一経ひ。又侍婢千人ミは女王ハ。筑
とほれ。小侍マサニてらやみ足す。又侍婢千人ミは女王ハ。筑
紫の偽僭クニ者ノもあらず。魏の仗スルにわざむられある

耶ハ。男子二人ミも備ハく。ぬハく。げハく。これハく。馭戎慨ハ
尔委く。辨セキ。もハじるて。もハく。べ。されば。玄神天皇仲哀
天皇ミは。子ミ。ゆハく。と。行の經ハ。たハく。う。り。これ
哉ハく。て。經ハ。といも。天下古今の人の文。みよハく。かハ
ーと。つ。べー。

素戔鳴ミハ。辰締ムツツヅ。は。序ハ。根ハ。小。新羅ハ。を。父。母。の。根。の
國ト。

ヨリハ。神代紀。吾欲從母ハ。於根國ハ。と。此神の出ハ。根ハ。國ト。
といふ。夜見ヨシの。の。よ。み。伊邪那美ミタマ。下ハ。ゆ。く。有。小。新羅ハ。を。父。母。の。根。の
國ト。ち。く。記。お。も。同。じ。く。妣國ハ。と。そ。う。れ。父。母。の。根。の
國ト。

ぬる。何れ書あるもアレがふと。母はうりめゆといひてハ。人の信をキドヒを恐きて。私より父字を加へてまたうせ巧みをとこ
あき。そのうり根ほといひ新羅すてけ神をより廢アキ
うじと掩むかくもあらば。母も子も祀するべからば。況や父母
國といひそじ記されむ。やうはうたをよくも思ひもつとも
きて。みづりおいづれふ。皆もひざとめうとうのうづくぞ。

あき。めとハ。書をよむ人の眼高うざられバ。共ふ被ド
カヅ。癡人以前尔後をとくぐめー。

こゑ又近代普通の学者の常の見解。えどすゞ強て全文を
いや先あらんと眼ちーとんじるハ。區すて眼とも卑くし

て。薄籍シロノシテおぢりき惑ハラハラへ。今一層眼を高くして見る。その非を
さとくべ。どう古學コトノハラフ眼を以てアレシバ。かくハモヘタテ天竺スルガも
薄雲シロノシテも三輪ミツウイも多様タケルのゆゑも。みる少名異古那シマニシタナ、神の行ハシメテ
をも始ハサウエり。あわとこそ思ひ入れ。さとバ薄雲シロノシテもアレ
くつある伏羲フクサイ神農ジンノウ黄帝カウテイ堯舜ヨウスンある。その左ハみる此神
よりぞ出ハシメテる。むと。みる事ハシメテる。ことにハ神代の傳說ハシメテを失ひて。今ふ至
るまで。この始ハサウエりをもアレヌハシメテ。ソレハ。アレ。ハ。極ハシメテ。くハシメテ。き
考ハシメテり。す。それどもかくかくふみのまごひの除ハシメテ。ぬ
人ハシメテ。す。と。癡人ハシメテ。前ハシメテ。ふ。爰ハシメテ。と。くハシメテ。かハシメテ。と。くハシメテ。かハシメテ。む。

天明五年乙巳十二月

左房宣長

ありませうのわぬ
今ハムリ。行先つちのじよき。いとちきあらじのほとうふ。まひお
ろえつまくくちうらひて。行くきとむりうちめや。ごうりし。
まくみかをと。中に年がつる。むりそみのじもうと。わどより
始毛よくあらせで。五十年ばかりふもやめぬ。ひそのをうへと。うり
きか。アヒ。此年うりそむはそいみ。トくさきくて。けじあ
とくくふこわりわくりて。そのをせくとくのかよひある。たし
すもよき。その後又みる月ばかりふぐくむ。うりそーと
一年ハ。あのうくねくかをと。そが。うそど。アスーと。取りぬ
はる。うを。ひととくかだくねてかる。じの面おみ草とをと

はまつこをけよ中。まろびよみてよふ先で。それわふも取る事
は。のよりきとて免ふぬうて。こかに生す。さて。あらよ
けふうちえ。タあはきのむうりにゆてはやれて。ひとと
しくあり。うくそくさうと。あはくのみきハ、ちうじ一
かみむ。こらねくか。まといとまぢうふ。あのくみあらが、いろ
ごりきくにあへきれど。まれゆ。あと多くるくたのをよ
卫。まごとちひきに。おはつふえ
えくと。この翁先とぞめ。たまけに。おあびくとてかくと
あらく。あひぬて。わき。まき。一に。けき。ぐそめ。一に
の中。おじ葉の。こぎ。行。いとよく似て。はう。それども。おー

うある。みみきの。はあく。じるむう。まく。お学。あ。まこ
と。も。う。と。て。よ。ふ。を。く。き。と。う。と。う。じ。の。う。や
う。う。ま。ふ。や。あ。う。と。う。じ。お。り。ゆ。だ。う。の。翁。葉。の。か。く。生。と。そ。め
つ。う。ハ。翁。も。お。く。聖。で。い。ま。又。花。と。れ。く。ま。ふ。く。れ。む。う
あ。の。じ。と。ま。な。そ。う。一。も。あ。う。ハ。う。く。ま。く。ま。を。や。う。ど。お。ま。う。に。か。る。
か。く。り。ふ。お。き。ま。う。が。か。く。の。み。か。と。と。い。ひ。う。や。ん。く。き。わ。く。ま
ふ。ゆ。く。う。と。も。わ。く。う。出。て。と。ひ。ち。う。ひ。く。か。こ。あ。ま。お。う。く。ゆ。お
げ。く。え。く。う。中。に。う。お。か。け。く。一。本。お。ま。お。び。ち。よ。の。中。う。ま。ま。葉
お。う。く。ゆ。く。う。と。か。く。ま。る。翁。ハ。大。や。ま。と。の。ま。ま。ま。ま。い。と。ち。ひ
ま。ま。か。ひ。な。げ。ま。ま。ま。づ。ま。と。つ。れ。て。じ。あ。ぐ。り。を。き。ま。ま。ま。り。

又西のまにもうこころうたまふともふはいと、うきわる中
かうこううけ狹麻呂といふ。東ある山のうへよどびうつり来
てり。やまとハとあらぬるのうみの翁うやむ。みなまく
ごとくとくうき人のいはちよ。うねうよにあざへてらふ。いふを
くとも一せのやどにハよもよドを。三十年ふもかぬむ耶と
とくげにのむ。先のゆきも。そくさきひやにかくうが
こと。えうわうとふやめゆ。げきの上をあまうりたつねど。を
べてはうあとうりうべくもうじ。又花さくまとみまあびま
げまうとがゆう葉とく。あくも。わはうけしげ。
わうゆう西のま。くはと葉もよめくう。くはうて

はうあれといへ。きふいとらやーくをづくう形うすとハつまもな
けど。人といふ。のこよまく令れあくがるりのと。きうま。五
年うかうめ。と。かううじま。たまく。あくぐくあく。又
さばうもま。にうとへふうじらとふ。はく。くをづくう形
うだも。などう取うし。うかういとはうみきいはち少。まわを
くふあうぬ。あふけうく。いと。ハ人のうへを。あみハやそく。か
はかうも。あべきといふ。あまううちうじて。まはうみゆ。ひ
ううちに。壁てうも。かど。よううまれ出で。令れあくのハう
き。いでかく。ひ来て。けく。まく。もとい。ハ。かく。へきみく
け。う。漢經史。う。ま。ハ聖賢。と。う。おと。く。一。け。う。桂

あひそを一ねざしもとくはあひそま紫れうへを
ほりうづく。あひはうめとせ。えひーかつらのふといじ
も。たとゆきとおれど。をうくありひゆうまに。きよ乃
つう二もくえもくおうゆかみのすそはふ

文政四年辛巳五月發行

京都三條柳馬場東工入ル

堺屋仁兵衛

同 三條寺町西工入ル

堺屋嘉七

勢州松坂日野町

柏屋兵助

紀州若山新通二丁目

帶屋伊兵衛

同所 新通三丁目

總田屋平右衛門

書林

